

今まで読んだ小説を振り返って

そのだ ともあき
園田 智昭
(商学部教授)

軽い話にしたいので、研究関連の読書ではなく、小説について、その時々感じたことを振り返ることにします。本を読むのが好きな人は多いと思いますが、どの本を読むか、その選択の仕方は人それぞれだと思います。私は特定の作者の本を集中的に読むタイプで、以下の作者の本については、大部分の著作を読んでいます。コナン・ドイル、江戸川乱歩、ヴァン・ダイン、エラリー・クイーン、ジョン・ディクスン・カー（カーター・ディクスン）、筒井康隆、阿佐田哲也、夢枕獏、マーサ・グライムズ、京極夏彦、綾辻行人、二階堂黎人、辻村深月 など。

全体的にはミステリー系の本が好きなのですが、ご多分に漏れず最近ではアンソニー・ホロヴィッツを読んでいます。マーサ・グライムズを知らない人も多いと思いますが、面白いですよ。機会があれば一度読んでみてください。

カーの著作については絶版になっているものが多かったのですが、ハヤカワ・ミステリ文庫で少しずつ再版が行われ、さらに未翻訳本の翻訳が2000年代に続いたことから、30年ぐらいかけてコンプリートまであと1冊になっています（早川書房さん、『ハイチムニー荘の醜聞』の再販を是非お願いします！）。

ところで、ミステリーでは最後に探偵役が一同を集めて謎解きをするのが定番ですが、実際には皆が好き勝手なことを話し始めて、探偵の話最後まで聞いてくれないのではないのでしょうか。また、探偵が独身で女性に興味がないのに、知的な美人から思いを寄せられるというステレオタイプの設定もどうかしてほしいものです（明智小五郎を見習ってほしい。興味がある人は『魔術師』を読んでください。）。

ミステリー以外の本では、受験勉強で作者と書名を丸暗記したのを反省して、モリエールの『町人貴族』と『守銭奴』（岩波文庫）や、サマセット・モームの『女ごころ』と『太平洋』（新潮文庫）を読みました。本学の経済学部に入學して、1年生の英語の授業で読まれた短編集に刺激されて、『アンダスン短編集』（シャーウッ

ド・アンダスン、新潮文庫）と『死の診断』（アンブローズ・ビアス、角川文庫）を読んだのも懐かしい思い出です。

「古典を読め」という人にモリエールを読んだことを話して、素っ気ない対応をされたこともあります。新しく出版された本を読んでいない人は、自分が若いときに読んだ本を「読むべき古典」と言う傾向があります。研究のテーマに関係する基本書は、いくら古いものでも当然読んでおくべきですが、楽しみで読む小説については、好きな本を読むことをお勧めします。

音楽や映画などに刺激されて読んだ本もあります。たとえば、キャメルというバンドのスノー・ゲースというアルバムが好きで、そのもともとなった「白雁（スノーゲース）」を含んだポール・ギャリコの『七つの人形の恋物語』（角川文庫）や、「ジャッカルの日」という映画を見て同名の本（フレデリック・フォーサイス、角川文庫）を読みました。何年か前には、演劇集団キャラメルボックスが公演した「無伴奏ソナタ」のもととなった小説（オースン・スコット・カード、ハヤカワ文庫）を読みました。

ところで、皆さんは本を買う派でしょうか、借りる派でしょうか。私は買う派なのですが、本の収納と処分が悩みの種です。今年になって、実家関連の場所に置いていた本を自宅に持ち帰り、一部の本を再読しているところです。記憶力の減退を感じる年になりましたが、昔読んだ本の筋を全く忘れて新鮮な気持ちで楽しめているのは思わぬ効用です。一方、自分が成長したからなのか、感性が鈍ったからなのかはわかりませんが、当時ワクワクしながら読んだ本でも、今読むと退屈に感じることもあり、不思議な気持ちになります。

いわゆる愛読書はないのですが、逆にサムエル・ウルマンの『青春とは、心の若さである。』（角川文庫）は絶対に読む気がありません。「エリザベート」（ミュージカル）の台詞の「ないものはないんだ」は、年齢についても当てはまるし、年相応でいいと思っているからです。